

## 生の終わりに

広島県 呉市立安浦中学校 2年  
大山 由宇（おおやま ゆう）

わが家には、何度話し合っても結論に至らない問題があります。それは、わたしの祖母の考えている献体についてです。祖母は、強く献体を希望していますが、実の娘であるわたしの母は強く反対しています。献体については、本人の意志のみで実現するものではなく家族の同意が必須です。このことを巡り、祖母と家族との話し合いの合意ができず、いつも最後にはどちらかが腹を立てておわってしまうのです。

祖母は持病を抱えており、今は元気そうに見えますが、過去に何度も大きな手術をしています。死と隣り合わせの体験をしてきた祖母にとって、「献体」は自分にできる医療や社会への恩返しだと言います。何度も命を助けてもらったことに対する感謝を、解剖実験のために捧げることによって、何かの役にたててもらいたいと純粋に思っているようです。母は、献体に納得いかない強い思いがあります。父親を早くに病気で亡くし病気がちな母親との生活の中で、一日でも長生きしてほしいという願いが強いのです。これまでの闘病生活を一番そばで見てきた母にとって、もうこれ以上亡くなってまで解剖や臓器摘出など身体を切り刻むようなことはしてほしくないと話しています。

ある日、祖母は孫である私に同意のサインをしてほしいと話しました。私はこれまでの話し合いの様子を見てきていますが、自分としては最終的には祖母が決断することであり、周りがいくら反対したとしても本人の意志を大切にすべきだと思っていました。だから、祖母が強く望むのであれば承諾のサインをしようと考えていました。

そのような中、学校の道德の時間で「白い記憶」という題材で話し合いをすることになりました。この話は、医師を志した医学生の「わたし」が初めて解剖実験をすることになり、はじめは恐れていた「死体」をやがて「番号札をつけた塊」と見るようになったことが書かれていました。そこにはもはや、人間としての尊厳は薄れ、「人」としてではなく「モノ」として何度も何度も切り刻み、縫い合わせを繰り返すと書かれていました。私は、ショックでした。「やはりそうか。番号で死体を扱うような場で何かの塊みたいに学生の手で解剖されるくらいなら、死後はすぐに家族の見守る中で火葬する方がばあちゃんにとっても幸せかもしれない。」と思いました。

しかし、この話には続きがありました。解剖実験の最終日に「わたし」は、ふ

としたきっかけに死体に残された「白い記憶」……。指輪の跡を見つけたのです。これまで何かの塊として死体を解剖し続けた医学生にとって、指に残された指輪の跡はまさしく「人」が「人」として生きた証であり、その人の生きた跡だったのです。そのことに最後に気づいた「わたし」は、これまでの傲慢ともいえた自分の行動を反省し、改めて一人の人間に対する畏敬の念を持ってその死体に対して心から頭を下げたということです。

この道德の授業を通して、私は祖母の献体について承諾のサインをするかどうか再び迷ってしまいました。はじめに考えていたように、祖母の希望を尊重したいという思いはありますが、祖母の「身体」がどのように扱われるのかについてはまだ、疑問が残ります。

一方で、祖母が話すように、この献体は人体の構造を知るための解剖実験で不可欠なものであること、医学のために何かの役に立ちたいという人たちの協力がなければ、人体解剖実習はできないということも確かです。まだまだ、私たち家族の迷いは続きそうです。

最近のニュースの中には、高校生が同級生を殺害し、死体を切るという残忍なものがあり、恐怖でいっぱいになります。その事件の動機を聞くと、「死体」を解剖してみたかった。という信じられない言葉……。いろいろな事情があり、不幸が重なり、その事件は起こったのだと思いますが、残忍で残酷で生命の尊厳が全く尊重されていないと感じます。殺害された人の両親や家族の悲しみ、そして本人の無念さを考えると、決して許されることではありません。

「世界人権宣言第一条」には、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ尊厳と権利について平等である……。」と書かれています。このように、生まれてから「死」を迎えるときまで、一人一人が大切にされ、その人らしく生きぬくことができるように尊重されることが大切です。私は、今回初めて祖母の献体の問題や道德の時間のなかで、「死」を通して「生」について考えることができました。日々の学校生活や家庭での生活の中で、今、自分は人を人として大切にしているか、常に自分に問いながら生活していきたいと思っています。